日本ウィルムス腫瘍研究-2 (JWiTS-2) は、2006 ～ 2014 年)に JWITS-1 研究に引き続いて、前向きの単群研究として行われた。、先行する JWITS-1 研究との最も大きな相違は、病理組織の中央診断が義務付けられたことである。

原発性腎腫瘍を有する登録患者 277 人のうち、片側性腎腫瘍を有する患者 225 人について 9 年間にわたって追跡調査を行った。 ウィルムス腫瘍（n = 178）の RFS と OS は、それぞれ 90.4% (P = 0.0003）と 96.8% (P = 0.054）で、JWiTS-1 の 74.9% と 89.4% より改善した。 JWiTS-2 におけるステージ I ～ III のウィルムス腫瘍の RFS 率は 90% 以上であったが、ステージ IV のウィルムス腫瘍の転帰は著しく不良であった（RFS: 66.2%) (P = 0.0094)。 腎臓明細胞肉腫（CCSK; n = 31）の RFS と OS は、それぞれ 82.4% (P = 0.30）と 91.3% (P = 0.42)、腎臓のラブドイド腫瘍（RTK; n = 16）の RFS と OS は、それぞれ 18.8%（P = 0.88）と 25.0%（P = 0.80）であった。